

チベット医学・祈りという名の有効成分

チベット医 小川 康

サンゲー・チュ・タン・ツォクギ・チョク・ナム・ラ
仏・法・僧の三宝に

チャンチュブ・バル・トゥ・ダクニ・キャブスチー
菩提を得るそのときまで、私は帰依いたします

ダクニ・ジンソク・ギーバー・ソナムギ
布施などの善行を通して功德を積み

ドラ・ペンチル・サンゲー・ドゥブ・バル・ショー
衆生のお役に立ち、彼岸の境地に達することができますように

すべてのチベット人の一日はこの三宝帰依のお祈りから始まります。そんな祈りの民族にチベット医学は根差しているのです。私もメンツィカン（チベット医学暦法大学）に在学した五年間は一時間の読経が日課としてありました。今回は、私がメンツィカンでともに学んだ同級生の物語を紹介したいと思います。

彼の名はテンジン。二〇〇三年、大学二年生の時のことです。一年生のとき、彼は優秀な成績を修めていました。しかし、次第に勉強についていけなくなり成績も下がってしまいました。さらに、このころルームメイトたちと仲が悪くなり、寮での生活に苦しさを感じはじめました。メンツィカンは全寮制で四人部屋。朝五時の起床に始る生活は僧院よりも厳しいと言われています。口数が減り、すっかり元気がなくなった彼を同級生たちは心配そうに見守っていましたが、みんなだって年末に行なわれる試験のことで頭がいっぱいです。十一月末から行なわれる恒例の暗誦試験では、早口言葉のスピードで一時間半も一字一句間違わずに四部医典を暗誦しなくてはなりません。しかも暗誦できなければ退学となります。八世紀にユトクによって編纂されたチベット医学教典はチベット語でギュ・シと呼ばれ、日本語では四部医典と訳されています。これは根本部（概要）、論説部（生理学・薬草学）、秘訣部（診断・治療）、結尾部（処方集）の四部から成り立っていることに由来しています。

二学年時の課題である論説部後半の暗誦は五年間の中でもっとも難しいといわれています。なにしろ四〇〇種類もの生薬の効能を一気に唱えなくてはならないのです。テンジンは九月になった時点で「どう頑張っても暗誦はできそうにない。試験の前に潔く退学届を提出しよう」と完全に諦めていました。同時に「どうせ辞めるなら、最後にあの伝説の薬・バーサムを作りたい。せっかくメンツィカンに入学したんだ。バーサム作りに挑戦してから退学しようじゃないか」と思い立ったのです。

バーサム、それはかつて高僧に献上する最高の貢物とされた伝説の薬。過去、十年間は一度も作られていません。しかも、その製法は四部医典・結尾部第七章に簡潔に記されているだけです。彼はすぐさ

ま親友のジグメとペンパに相談しました。「今度の土曜日と日曜日の休日を利用してバーサムを作らないか。責任はすべて僕が持つから」。実は、当時、メンツィカンの授業に製薬実習はありませんでした。実践が欠けた教育カリキュラムに対する不満の声は以前から生徒のあいだで上がっていました。とはいえ、生徒たちが自主的に製薬を行なえばメンツィカンへの抗議行動とも取られかねます。でも、テンジンには怖いものなんてもう何ともありません。彼の勢いに押されたのでしょうか、ジグメ、ペンパも笑顔で答えてくれました。そして一人、また一人と賛同者が増え、前日には十三期生全員、二五名での製作会議が開かれました。教典に埋蔵されたままのバーサムを自分たちの手に取り戻したい、みんな、そう願っていたのです。もちろんそのなかに私も含まれています。さらに、願ってもないことに、十年前にバーサムを作ったことがあるダクパ先生が指導してくれることになりました。実は、このとき先生もテンジン同様に大学を辞める決意をしていたのです。ただし、先生は遠く離れて暮らす家族のもとに帰ることが理由です。

そして十月八日土曜日、休日のはずの十三期生の教室から読経の声が構内に響き渡りました。製薬のために用意した十三種類の薬草と製薬器具を仏前に供え、全員で薬師如来経を唱えたのです。

果たして自分たちにバーサムを完成させることができるのだろうか。不安を打ち消すために読経は繰り返し続けました。心の底から製薬の完成を願って祈りを捧げたのです。こうして「勇気」という成分が薬草に込められました。いざ製薬の作業が始ると、教室には笑い声が響き渡りました。薬草を選別し、粉碎し、混ぜ合わせながら、今度は「楽しさ」という有効成分が込められていったのです。テンジンは誰よりも楽しそうにしています。同級生みんなとの一体感に酔っているようにも見えます。その夜の作業は十時まで続けました。

翌朝、日曜日は朝六時半から作業が始まりました。グツグツ煮込んでいきます。みんな四部医典を手にしながら見守っています。何度も煮て、何度も濾したところ、最後にはなんとグツグツ煮立っているのに指を入れても熱く感じない状態になりました。四部医典に記されたどおりの神秘的な現象にみんな興奮を隠せません。テンジンも指を洗ってから鍋に指を入れて、人肌ほどしかない温度を確かめました。薬が純化された瞬間です。さあ、いよいよ仕上げの作業に入ります。蜂蜜にヤギの肝臓と酒を入れて煮込むなど摩訶不思議な工程もありました。作業は順調に進みました。しかし、あろうと最後の工程を間違えてしまいました。ダクパ先生の記憶が曖昧だったのです。透明な溶液が真っ黒に変色してしまいました。「なんてことだ…」。呆然と立ち尽くすテンジン。「これも運命か」と諦めていたとき生徒会長のニマが彼に「どうする」と判断を迫りました。もとはといえばテンジンの一念から始ったことなのです。「ここまでだ。さあ、後片付けをしよう」と言おうとしたとき誰かが声を上げました。「もう一回やろうよ。薬草を調達して、もう一回やろう！」。あれはいったい誰の声だったのかわかりません。いずれにしても、それがみんなの総意へと変わるのに時間はかかりませんでした。そのころにはバーサム製薬実習は学内に知れ渡り、ベテランの先生、製薬工場の職員が次々と駆けつけてくれました。さらに、なんと月曜日と火曜日の授業が自習になりました。つまり「最後までやり遂げなさい」という先生方の温かい心配りだったのです。今度はもう絶対に失敗できません。ダクパ先生だけでなく、多くの先生の指導のもとで製薬は進められました。そして火曜日の早朝、ついにバーサムは完成に近づきました。薬を丸めて祭壇に並べると、祈りの儀式に入りました。チベットの薬は最後に祈りを込めてこそ完成するのです。

大きな仕事を成し遂げたという達成感に包まれつつ、みんな清々しい気持で読経しています。読経を終えて完成したバーサムを学長に献上すると複雑な表情をされました。学生たちの勝手な行動を公の場で認めるわけにはいかないのです。それでも「よく完成させた。でも、まだまだだな。以前、私が作ったのはもっと良くできたぞ」と、優しさと厳しさが入り混じった御言葉をいただきました。

まだ物語りは続きます。バーサム実習の翌日から、みんな気持を切り替えて暗誦試験の準備にとりかかりました。テンジンもできるところまで頑張ってみようと気持を切り替えました。毎朝五時に起きてすぐにバーサムを真言とともに服用して暗誦を繰り返します。バーサムには若返りとともに記憶力を高めるといふ効果があるのです。そして、十一月二八日午後二時から、いよいよ彼の暗誦試験は始まりました。試験は先生方に四方を取り囲まれた中に一人ずつ座って行われます。結果はどうだったと思いますか？。時間はちょうど九〇分、たった一箇所のミスだけで暗誦を終えることができたのです。私はこう思うのです。バーサムに、みんなの勇氣、楽しさ、祈りが込められたことで奇跡的な薬効が宿ったのだと。試験を終えて階段を下りていくと同級生のみんなが彼を待っていました。みんな自分のことのようにテンジンを心配していたのです。「テンジン、凄いじゃないか」。一人一人と握手をしながら「もう一度、みんなと一緒にチベット医学の勉強を頑張ってみよう」。彼はそう決意を新たにしました。

さらに話は続きます。五年後の二〇〇八年十二月には大学の主催でバーサム製薬実習が開催されました。もうすでに卒業していたテンジンや親友のジグメも駆けつけて、ちょっとだけ先輩風を吹かせながら見守っていました。ジグメが「俺たちがやったんだよな」と呟いたとき、テンジンはチベット医学の歴史に小さな足跡を残したような満足感に浸ることができたのです。

チベット医学は何千年の歴史とも言われ、神秘的、哲学的なことばかりが日本に紹介されています。でもこうした、不器用ともいえる日々の暮らしの中にこそチベット医学は存在していることを、どうか日本のみなさんに知っていただきたいのです。いまでも、むかしもチベット医学生たちは土や薬草の匂いの中で、泣き、笑い、葛藤しながら生きているのです。

ジグメはいまダライラマ法王の侍医補佐として重要な責務を担っています。ペンパは製薬工場で指揮をとっています。そのほか同級生たちはインド、ネパールの村々で医者として奮闘中です。そうそう、テンジンはどうしているかって。それはみなさんのご想像にお任せします。残念ながら彼はあまり優れた医者ではないようです。その代わりバーサムにまつわる物語を語りながらチベット医学の祈りの力を伝えていることでしょう。そんなチベット医が一人くらいいても素敵ではありませんか。

季刊誌『春秋』（2011年5月号 春秋社）より、同タイトルの寄稿文を転載。



メンツィカン 13 期生



授業風景



薬用バター製作中 (その 1)



薬用バター製作中 (その 2)